

本書のテーマは「私」である。今やコンピューターやネットワークによって構築された仮想的な空間であるサイバースペースでは、私たちが自己を「私」として自由に演出し、そのイメージを介して果てなく繋がっていく。だが、「私」にコントロールしきれない繋がりが広がったことで、途轍もない疲労感を生み出している。こうした現状に対し、「私」を取り戻すためにはどう考えればよいかを哲学の観点から論じるのが本書である。

本書は4つの章で構成されている。1章では「私」がサイバースペースに接続される一方で、繋がりに得る情報に意味を与える「私」がいない。そのことで細かな情報の塵が頭に積もり、ふとした瞬間に異様な疲労感を感じている「私」がいる。この疲労の正体は退屈な時に行う目的なき情報収集にある。常に切り替わる情報提供があり、個人がその情報アクセスのプロセス全体に意味を感じることができなくなった結果であると著者は指摘する。この退屈を解消できるのは、何かに没頭する「動物化」と、何かに向かおうとする心の動力の「善への意志」である。この二つをサイバースペースに置き換えてみると、人は動物化によってエンタメ的コンテンツを消費するか、善への意志によって倫理的コンテンツを消費するかのどちらかに駆り立てられることになる。しかし動物化も善への意志も退屈が打ち消せないまま、情報の過剰摂取が進行するという点で同じである。

2章では「私」の本質を「絶対性」と「有限性」にあるとしている。「私」に見えているものを見えていないと言うことはできず（絶対性）、しかし私の見え方は完全なものではない（有限性）。著者は希薄になった「私」を取り戻すためには、デカルトの哲学と「私」の本質である絶対性と、有限性を合わせた新デカルト主義の両者が必要であると述べている。

この新デカルト主義から学ぶことのできる点は3つある。1つ目は物事に対して理由付けができるものはどんなことでも疑い、逆に理由付けができないものは疑えないものとして分けることであり、これによって情報に対する中途半端な疑いのせいで脳の余計な容量を使わずに済む。2つ目は複雑な問題や微妙な物事には判断を中止することであり、人間と社会に関係する事象は簡単に真偽が決まるものではないので判断保留は一つの立派な態度決定となる。3つ目は「私」の絶対性と有限性を自覚することであり、「私」の絶対性と有限性は他の「私」と同じように共有する人間の基礎条件であるので、考えや立場が対立した場合でも「私」の認識の公平さは保持される。この認識があれば相手とうまく話が合わない場合でも力に頼ることなく言論の努力を持続させることができるのである。

3章では SNS で出回る言説の真偽を自分で判断する際の態度がテーマである。SNS で述べられていることを漠然と受け入れたり猛烈に批判したりするのではなく、まずは「私」にとってその事象がどのような意味を持つのかを深く掘り下げて、その情報に対して自分なりの言葉と理論を組み立てることが大切であるとしている。ある情報を判断するには4つの工程がある。1つ目は物事を急速に判断することを避けて一度立ち止まること、2つ目は自分が判断を下す方向性を決めるためにキーワードを抽出すること、3つめは自分が抽出したキーワードを主観で反省すること、4つ目は反省したことを元にしてキーワードの本質を見ることである。意見が食い違った場合には、まず互いの違いを相互承認したうえで全員が納得できる共通性を見出すことが重要だとしている。

そして4章では、私たちが直面する事象はそれが何なのかよく分からなかったり、うまく答えを出せなかったりする場合が存在することについて述べている。その場合は情報を集めたり何度も考えなおすことでその蓋然性を高めることができるが、これを行うには簡単に答えを出したり、処理ができない事態を直視する能力であるネガティブ・ケイパビリティを育てることが必要になる。

本書の優れた点は、4章で取り上げられたネガティブ・ケイパビリティに注目していることである。近年はソーシャルメディアが普及したことで個人が容易に情報を発信できる環境になっている。これまでのメディアリテラシーの議論では、利用者がその能力を高めて情報の正確さを見極めることが重視されてきた。しかし最近ではAI技術の向上も伴い、メディアリテラシーを高めても情報を見極めることが難しい状態になっている。メディアリテラシーを重視すると情報を正しいか正しくないかの二極化で考えてしまうことになり、「私」の疲労はたまるばかりとなる。むしろネガティブ・ケイパビリティによって、正確か分からない情報を自ら避けることが重要となるのであり、インターネット社会において大量の情報に晒されて「私」が疲れてしまわないために大切な指摘となっている。